

### 令和4年度 教職実践研究フォーラム 2023年3月4日



今年度は、現職教員学生10名と学部卒学生13名の計23名の実践研究報告を4つの分科会に分かれて実施しました。県内外から100名を超えるお申し込みをいただき、対面とオンラインを併用して開催しました。

参加者からは「現場での疑問の解決や今後の指導方針を考えるきっかけになりました」「どの研究も理論を踏まえての実践であることがうかがえました」といったメッセージをいただきました。

### 退職の挨拶



武蔵 博文

#### 「支援教育を中心に」

定年となりました。教職大学院では、たくさんの方々にお世話となりました。私が大学生のとき、障害児施設でボランティアを始めた頃、障害のある子どもたちの学校はまだなく、施設は行き場のない子どもたちで溢れていました。土曜の午後、月に二度のボラなのに、どこかにいなくなる子、喧嘩をしだす子、自傷をはじめの子、散々であったことを思い出します。ところが、しばらくして学校ができました。スクールバスがきて、施設の子たちの大半を連れて行きます。しかも毎日です。何が始まったのかと驚いた記憶があります。その後、子どもたちが皆変わっていくのを間近で見させていただきました。

それから40数年が経ち、支援教育は、通常の学校も含めて学校教育の要になろうとしています。すべての教員に教育のプロとして高い支援力が求められます。自分が専門とする教科・領域の指導では、どんな子どもでも指導できるプロを目指してください。

皆さんのますますのご発展とご活躍をお祈り申し上げます。



野村 一夫

## 学び再考!? 「学び心を起動する」

香川大学教育学部学舎入口のデジタルボードで流されているキャッチコピーです。香川大学教職大学院の開設と同時に実務家教員として勤めることになり、「私の役割は？」や「何を教えることができるのか？」などと悩みながら着任して、早くも7年が過ぎました。広く落ち着いた雰囲気学の学内では、図書館や教室などで若人が学ぶ姿に触れることができ、実務に追われていた私の心にも「学び心」のスイッチを与えてくれました。カリキュラムマネジメント、自律的学校経営、多職種連携、チームワーキング、リーダーシップ、学校と地域の連携・協働など、これまでの実務を振り返りつつ理論の裏付けは何かと探究し、コロナ禍における遠隔授業の経験からは学校教育の在り方を考える機会が得られました。

この7年間、次代の学校教育を担う院生のロールモデルたらんと思っはいたものの、反面教師であったのではと危惧を抱いています。「学び」は自ら会得するものであり、院生のみなさんの実践研究を支援するのが私の使命でありながら、すっかり馬齢を重ねてしまいました。4月からは職業人としての人生を一区切りし、「人」としての在り方生き方を追究していきたいと考えています。大変お世話になりました教職大学院の先生方をはじめ、修了生や現役院生のみなさまに衷心から感謝申し上げます。7年間ありがとうございました。

「子研究講義 第37巻第3号、pp.29-39」

(演習)地域からの要望に、どのように対応するか？

土曜日に開催される地域の行事へ、教員の参加が求められた時、あなたは教頭としてどのように対応しますか？

**5分間** 各自の考えをメモ

**15分間**

- 「ブレイクアウトルーム」機能を使用します。  
→自動的に4グループ(4~5名)に分かれます。
- 「ブレイクアウトルーム」内では、次の点に留意してください。  
① 進行役(1名)を決める



山本 茂喜

四十年以上前、私が学んだ筑波大学大学院の国語教育コースでは、当時としてはまだ珍しいことに、現職の先生が内地留学として派遣されていました。たしか一学年下には九州のある名門高校の先生が、その下の学年には関東地方の小学校の先生が来られていました。短期研修の現職教員ではなく、同じ院生として学ぶのは新鮮な体験でした。筑波大学の前身である東京教育大学時代からの伝統なのか、国語教育の理論的・原理的な講義が中心で、また私自身もそれに魅力と憧れを抱いていたために、まったく異なる観点からの発言には驚きと戸惑いを感じたことを今でも良く覚えています。しかし、理論と実践の両面からの触発と融合が必要であることがよくわかりました。学生上がりの仲間だけで過ごすことなく、ベテランの現職教員と一緒に楽しく学べたことは、貴重な体験だったと思っています。

「夢殿の救世観音を見てみると、その作者といふやうな事は全く浮んで来ない。それは作者といふものからそれが完全に遊離した存在となつてゐるからで、これは又格別な事である。」 —— これは志賀直哉の有名な言葉です。

修了生の皆さんが教壇に立って、あるいは勤務校に戻って、見事な授業を披露したとき、あるいは素晴らしい研究発表をしたとき、誰もそれまであなた方を形作ってきた人たちのことは思い浮かべないでしょう。それがまた本当の成長と言うことなのでしょう。しかし、その中には、この教職大学院での学びの日々が確かに息づいているはずで

皆さん方のこれからのご活躍を心からお祈りしています。



## 離任の挨拶



毛利 猛

本年3月をもって離任することになりました。教職大学院は2016年4月に、教育学研究科の入学定員51名の枠の中で、専攻の一つ（定員14名）として開設されました。初年度は、15名（現職教員12名、SM3名）の新入生を迎え入れることができました。当時、私は教育学研究科長でしたが、有馬専攻長を中心とする専任の先生方と第一期生たちの熱意がかみ合って、新しい大学院における教員養成・研修の高度化という理念が現実化していく様子をととても頼もしく見ていました。教育学研究科は、2020年4月に、教科領域を含む拡充した教職大学院への重点化を行いました。この重点化によって、新たな担当教員が、学部とのダブルカウント教員として（私も含めて）加わるとともに、授業力開発コースに多くのSMが入学するようになりました。教職大学院は新しいステージへと移行しつつあるように思います。

4月からは、岡山の私立大学に転出します。香川大学教職大学院のますますのご発展をお祈り申し上げます。ありがとうございました。

## 令和4年度 修了生の声

### 教職大学院の1年間を振り返って

学校力  
開発コース

高橋 由佳

現職院生

教職大学院での1年間は、学ぶことに集中できた大変貴重な1年間でした。現場では、目の前のことに精一杯の毎日でしたが、講義や実践研究で、置籍校や学校教育、これまでの教職経験を一步離れたところから振り返ったり考えたりすることで、課題解決の糸口が見えたり、新たな課題に気づけたり、実践していたことに価値づけがされたり、学ぶことの大切さを改めて感じることができました。講義の中では、先生方から教えていただくだけでなく、年齢や校種、教科が違う院生の皆さんと教育について語り合う機会もたくさんあり、自分の教育に対する見方・考え方の広がりや深まりも感じました。教職大学院で、こんな実践を試してみたいという楽しみをたくさん見つけられたので、現場に戻ってからも周りの先生方と共に教育活動に励んでいきたいと思っています。1年間、ありがとうございました。

### 2年間の大学院生活を振り返って

私が大学院に進学した理由は、現場に出るのが不安だったからです。今は現場に出て挑戦したいことがたくさんあります。その自信を与えてくれたのは、2年間の大学院での学びがあったからです。

講義では、知らなかった学校組織の動きや課題、未完成な自分の授業の課題、社会の変容と現代の子どもたちが抱える問題を幅広い視点から考え、漠然としていた教師像を明確にすることができました。実習では、実際と理論とのギャップに悩むこともありましたが、どちらかに偏ることなく、目の前にいる子ども達と向き合うことが1番大切だと実感しました。

充実した2年間を過ごすことができたのは、大学院で出会った方々のおかげです。ありがとうございました。

授業力  
開発コース

西谷 侑里子

学卒院生

### 「当たり前のできること」へ感謝

特別支援力  
開発コース

倉坪 有香

現職院生

今年度はコロナによる制限がかなり緩和され、講義や実習は原則対面で行われました。先生方の講義はもちろん、他校種の教員や岡山からの派遣教員の先進的な取組がとても参考になりました。また、医療機関や療育機関等での探究実習は、今まであまり触れる機会がなかった医療や福祉の制度面についても知ることができ、視野を広げることができました。そして何とんでも教職大学院の学びで一番大きかったのは、アウトプットの重要性です。座学で得られた知識が自分の中で消化され、理解がより深まったと感じます。

この1年間、素晴らしい学びの機会を与えていただいたことに感謝して、子ども一人一人の成長に心を配れる教員を目指して今後も学びを続けていきたいです。

## 香川県教育センターとの連携について

このたび香川大学大学院教育学研究科は、香川県教育センターと新たに協定を結び、教員研修の高度化と一層の拡充に連携協力することになりました。

教職大学院のホームページでもお知らせしておりますので、ぜひご覧ください。



教職大学院の  
ホームページ